

## 五 評論 (二) 自然と人間の関係をとおして考える (内山 節)

### 「この村が日本で一番」

内山 節

春を前にした、フランス・ラルザック地方の山村を訪れたときのことだった。ところどころに灌木かんぼくの茂る、標高一〇〇〇メートルほどの台地がつづき、私の足元にはいやになるほどの痩せ地やせが広がっていた。この土では畑作は無理だろう。畜産を営むにしても、大食の牛を養える草の生産力はないだろう。私はこの条件の悪さに少し同情していた。

ところが村人は誰一人として、この現実を嘆こうとはしなかった。そればかりか、村人はこんなふうに言う。「ここは山羊を飼うのに適した地域ですから」。荒地地で山羊しか飼えないといった気持ちは、少しもいだいていないようである。

自分たちの暮らす地域は、他所と比較するものではない。そこは、自分たちにとっては世界の中心であり、絶対的な場所である。なぜなら、この地域に生まれた自然や歴史、文化、コミュニケーションとともに、自分もまた存在しているのだから。それらと自分自身とは、分離できない相互性をもっている。

今日の日本の山村の人々も共通する感覚をもっている。以前に群馬県の山村、上野村に暮らすおばあさんに、「この村から一度も出たことのない私が言うんだから、間違いない。この村が日本で一番よい所だ」と言われて、私は感服したことがあった。自分をつくりだしている村は、比較する必要もなく一番よい所である。

経済のグローバル化とは、ラルザックの農民的に表現すれば、アングロサクソン（米英型）の資本主義の世界化にすぎず、この動きに飲み込まれることは、「アングロサクソンの資本主義」の価値観に統合されることを意味する。それは、それぞれの社会の歴史や文化をこわしながら、自然と人間の関係をも変えることによって、自然にも新たな負荷を背負わせていくことになるだろう。農業や林業が衰退すれば、その地域の自然が荒れていくようにである。

だが、より重要なのは次のようなことである。市場経済が拡大すればするほど、私たちは、自分の存在をつかみとることができる、関わりあう世界をもたなければ、人間は消費されつづける世界に飲み込まれるばかりになってしまう。交換可能な世界のなかで、人間自身が、消費されていくように働き、暮らす社会をつくりあげてしまう。グローバル化というかたちで拡大していく市場経済は、人間自体に対して深刻な問題を投げかけているのである。だからこのような時代には、「自己実現」とか「自分探し」、「個の確立」といった疎外された意識が次々にでてくる。誰もが、自分の確実な存在をみつけだせないのである。

そう考えたとき、私はラルザックの農民や、上野村のおばあさんの表情をつくりだした世界に戻る。彼らは、関わりあう世界のなかで、自分を見失うことなく生きていた。関わりあう世界が、自分は何者なのかを覚えてくれていた。

人間は関係のなかで自己をつくっている。この関係する世界を見失ったとき、人間は漂流しはじめる。市場経済は、この漂流する個人を、交換可能な世界に飲みこむことによって、グローバル化をとげてきたのである。

〔朝日新聞〕夕刊 二〇〇一年三月九日

人間は、関わりあう世界のなかで、自分をつくりだしている。この世界は、自分が直接関わりあう世界であり、その意味でローカルな世界である。

現在の私たちは、グローバル化していく市場経済のなかで暮らしている。その点では、ラルザックの農民も変わることはない。だから、実際ラルザックの農民たちは、ときどきニュースに登場するように、WTO（世界貿易機関）の農産物をめぐる会議に抗議団を派遣したりしている。ところが、彼らは村に帰れば、関わりあう世界をもち、この世界のなかで自分をつかみとることができる。逆に言えば、確実な自分たちの世界をもっているがゆえに、現実の動きに翻弄ほんろうされることなく、「我らが世界」をこわすグローバル化の流れに抵抗できるのである。

私たちが失っているのは、この「我らが世界」であり、自分を見つけだすことができる関わりあう世界である。

二十世紀の社会は、市場経済を舞台にして、すべてのものを交換可能なものへと変えていった。交換可能な領域を拡大することによって、市場経済は「発展」し、そのグローバル化を押し進めていったのである。この動きのなかに、人間も巻き込まれた。気がつく私たちには、いつでも他の人々と交換されてしまう労働の世界で働き、交換可能な地域で暮らしながら、根無し草のように、市場経済がつくりだした世界のなかに漂流するようになっていた。

市場経済が拡大していく背景には、このような問題がひそんでいる。だからそれは、単なる経済の効率化の問題ではない。もちろん、今日の

●資料分析メモシート（指導資料）

・グラフから分析できることを、重要だと判断した順番に書いてみよう。

・重要度を判断した根拠を書こう。

●Aさんの文章検討シート（指導資料）

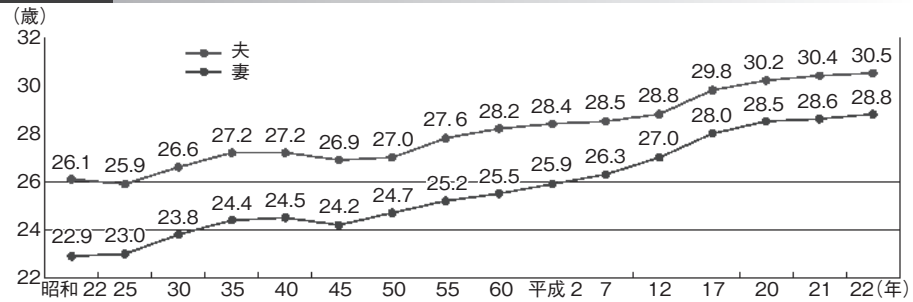
・Aさんの文章をもとに、別の展開を考えてみよう。

「学校に通う意義」について、日本では「友達との友情をはぐくむ」「自由な時間を楽しむ」と考える人が、他国と比べて多いことがわかった。一方、「一般的・基本的知識を身につける」「職業的技術を身につける」と考える人は、他国と比べると少ない。

と考えられる。

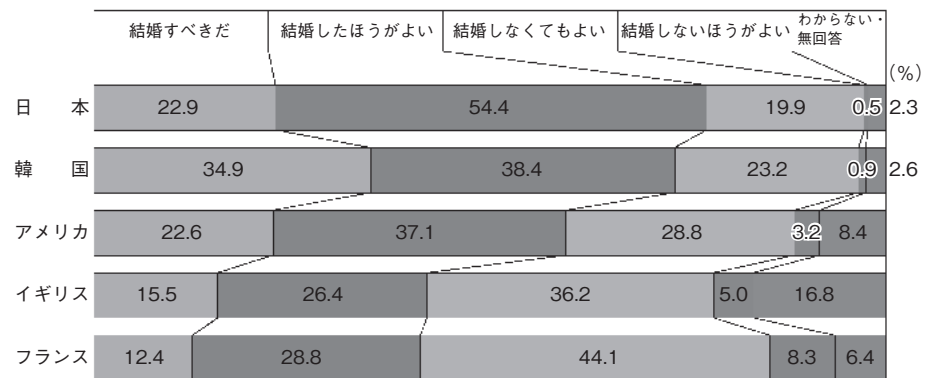
●子ども・若者の現状（授業展開指導ノート B案）

図1 平均初婚年齢の推移



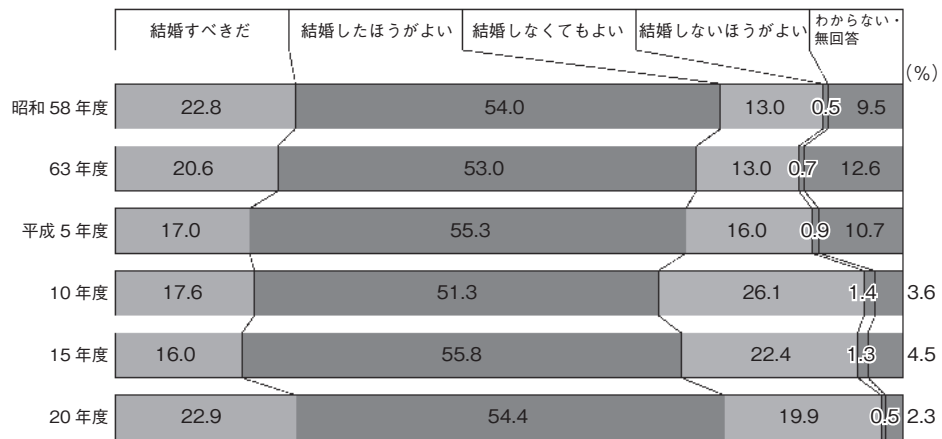
(注) 昭和47年以前の数値には沖縄県は含まれない。  
資料：厚生労働省「人口動態統計」

図2 世界の青年の結婚観



資料：内閣府「第8回世界青年意識調査」(平成20年度)

図3 日本の青年の結婚観の推移



資料：内閣府「第8回世界青年意識調査」(平成20年度)

『平成24年度版子ども・若者白書』より

※ Word データはありません。

## この草子、目に見え心に思ふことを

この草子、目に見え心に思ふことを、人<sup>①</sup>やは見むとすると思ひて、つれづれなる里居<sup>②</sup>のほどに書き集めたるを、あいなう、人のために便<sup>③</sup>なき言ひすぐしもしつべき所々もあれば、よう隠し置きたりと思ひしを、心<sup>④</sup>よりほかにこそ漏り出でにけれ。

宮<sup>⑤</sup>の御前<sup>⑥</sup>に、内の大臣<sup>⑦</sup>の奉りたまへりけるを、「これに何を書かまし。上の御前には『史記<sup>⑧</sup>』といふ書をなむ書かせたまへる。」などのたまはせしを、「枕<sup>⑨</sup>にこそははべらめ。」と申ししかば、「さは、得てよ。」とてたまはせたりしを、あやしきを、こよや何やと、尽きせず多かる紙を書き尽くさむとせしに、いとものおほえぬことぞ多かるや。

おほかたこれは、世の中にをかしきこと、人のめでたしなど思ふべき、なほ選り出でて、歌などをも、木、草、鳥、虫をも、言ひいだしたらばこそ、「思ふほどよりはわろし。心見えなり。」とそしられめ、ただ心一つに、おのづから思ふことを、たはぶれに書きつけたれば、「もの<sup>⑩</sup>に立ちまじり、人並み並みなるべき耳<sup>⑪</sup>をも聞くべきものかは。」と思ひしに、「恥づかしき。」なんどもぞ、見る人はしたまふなれば、いとあやしうぞあるや。げに、そもことわり、人の憎むをよしと言ひ、ほむるをもあしと言ふ人は、心のほどこそ推しはからるれ。ただ、人に見えけむぞ妬<sup>⑫</sup>き。

左中將<sup>⑬</sup>、まだ伊勢守<sup>⑭</sup>と聞こえし時、里におはしたりしに、端<sup>⑮</sup>の方なりし畳をさし出でしものは、この草子載りて出でにけり。惑ひ取り入れしかど、やがて持ておはして、いと

久しくありてぞ返りたりし。それよりありきそめたるなめり、とぞ本に。<sup>⑯</sup>

## 〔跋文〕

- ⑭ 恥づかしき こちらが恥ずかしくなるほどよい出来だ。
- ⑮ 左中將 左近衛府の次官。ここでは、源経房（九六―一〇三）をさす。経房は長徳元年（九七）正月から二年末まで伊勢権守、長徳四年（九九）一〇月から長保三年（一〇一）八月まで左中將であった。
- ⑯ 畳をさし出でしものは 敷き物をさし出したところが。
- ⑰ とぞ本に 「…と原本に書いてある」の意味。本を書き写した人が記す注記の形式。

## 〔現代語訳〕

この草子は、（私の）目に見え心に思い浮かぶことを、人が見るなどということのままかあるまいと思つて、何もすることがなくて退屈な里住まいの間に書き集めたものを、あいにく、人のために具合の悪い失言もしてしまいそうな所々もあるのでよく隠しておいたと思つたのだが、自分の意に反して（世間に）漏れて出てしまったことよ。

中宮様のところに、内大臣（伊周）様がさしあげなされたの（その草子）を、「これに何を書こうかしら。天皇のところでは『史記』という書物をお書きになっていらっしやる。」などとおっしゃったので、「枕でございましょう。」と申し上げたところ、「それではとりなさい。」といつてお与えになったのだが、へんなことを、あれやこれやと、限りもなく多い紙を書き尽くそうとしたので、たいそうわけのわからないことが多いことであるよ。だいたいこれは、世の中でおもしろいこととか、人がすばらしいなどと思ひそうなことを、やはり選び出して、歌なども、木、草、鳥、虫などをも言い出したのだつたら、「思うほどよりはよくない。心の浅さがよくわかる。」と非難されるだろうが、ただ（自分の）心ひとつに、自然と思ひ浮かぶことを、冗談半分に書きつけたのだから、「ほかの作品の中に伍して、人並みであるという評判を聞くはずがあるものか。」と思つていたところ、「すばらしい出来であるよ。」などと、見る人は批評なさるようなので、たいそう不思議なことですよ。なるほど、それも当然なことで、人がにくむのをよいと言ひ、ほめるのを悪いと言ひ人は、それで心の底が想像されてしまうのだ。（だから私のものをよいという人は、本当は悪いと言ひたいのでしょう。）ただ、人に見られてしまったのがくやしきことです。

左中將が、まだ伊勢守と申した時、（私の）私宅においてになった折に、端のほうにあった畳をさし出したところ、何とまあ、この草子が（畳に）のつて出てしまったのであった。あわてて取り入れたのだが、（左中將は）そのまま持つていらっしやうて、たいそう長いことたつて（草子は）返つて来たのだつた。それより広まりはじめたようである、と原本に書いてある。